
初恋の色

心愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋の色

【Nコード】

N9976S

【作者名】

心愛

【あらすじ】

女子高生になる、「清水 優」は、今まで、「恋」というものをしたことがない、超恋愛初心者かつ、鈍感少女だった。

そんな優のとなりの席になったのは、中学のときもモテモテの、学校一かっこいいとウワサされる、「桜庭 佑」。

そんな優と佑の、ありそうでなさそうなラブストーリーー。

opening 優

私は、今まで、「恋」というものをしたことがない。

人を好きになる。その気持ちがわからない。

友達には、彼氏がいる人もいる。

でも、すぐに別れたり、嫌になったり。

「恋」って、そういうものなのかな？

簡単に、好きになったり、嫌いになったりするものなのかな？

それでいて、人の人生を変えてしまうほど、大きなものなのかな？

私は、わからない。私の初恋が、どうなるのか。

むしろ、恋なんか、することがあるのかどうか…。

そんなことを考えてた私が、これから始まる高校生活で、恋を知ることになるなんて…。

episode 1 優 〈東中の王子様〉

中野山高校、1年4組。

私は今、そのクラスにいる。

今までとは全然違った、キレイな教室に、机、椅子。

空も晴れわたって、絶好の入学式日和！

…なんだけど！！

やたら周りが騒がしい。

このクラスの人も、友達がいるのか、遊びに来ている他のクラスの人、なぜかみんな落ち着きがない。

「優！ おはよっ。同じクラスになれたね」

「ああ、おはよ、麗奈」

中学のときの友達、「河瀬 麗奈」が、嬉しそうな顔をして、教室に入ってきた。

「ねえ、麗奈。なんでそんな嬉しそうなわけ？ なんかあったの？」
席に着いてもまだなおニコニコしている麗奈。なんか変…。

「だって！！ このクラス最高じゃん。優がいるし」

え？ 私がいるからなの？

「それに、なんといっても、あの、桜庭くんがいるんだよー？ もう、超ラッキーっ！」

なんだ、私がいるからじゃないんだ…って、そうじゃないでしょ。

「桜庭くん？ 誰それ？ 麗奈の知り合い？」

「えっ！？ 優、桜庭くん知らないの！？」

…はい、知りません。うちの中学にいなかったし、そんな名前の人。
「東中学の、王子様だよっ。もう、超かっこいいの！！ 練習試合とかで、東中行ったときとかに見ただけだよ」 練習試合

王子様あ？ 誰だよ、わけわかんない。

東中は、私の中学、西中に、わりと近い中学だけど、そんなの聞い

たことないし…。

「もう、優はそういうのに、ほんとうといよね。たぶん、このクラスの人ほとんどが、知ってるんじゃないってくらいなんだけど。肝心の本人は、まだ来てないけどね」

うんって言われてもなあ。

ていうか、だからみんな落ち着きなかったのか。その桜庭くんやらのせいで。

でも、どんな人なんだろう？ そんな有名になるくらいだし、そうとうかっこいいんじゃないけど。

「あ、ほらっ。桜庭くん来たよ！」

麗奈がそう言ったと同時に、教室の空気が変わった。

そしてその桜庭くんは、教室に入って来て、なんと、私のとなりに座った。

episode 2

優

「桜庭くんの人気ぶり」

……。桜庭くん？って、私のとなりの席だったんだ。

私は、そうなんだー、と思って、麗奈に話しかけようとした。けど、やめた。

だって、麗奈、完全に目がハートになってる。あ、麗奈だけじゃないか。

このクラスにいる女子、全ての人が、桜庭くんを見つめている。

教室中が静かで、なんの関係もない男子までもが、ただごとではない雰囲気を感じて、しゃべるのをやめていた。

「…どうしたの？　なんかこのクラス静かじゃん。みんなもつしやべろーよ。仲良くしよーぜ？」

静寂を破ったのは、この静けさのものの、桜庭くんだった。

みんなが桜庭くんのことを見ている。でも、桜庭くんは、あんまり気にしていなくて、近くにいた男子に話しかけていた。

そのあと、男子たちが次第にしゃべりだし、教室はもとのにぎやかさになった。

女子たちは、もう桜庭くんの話しかしていないんだけど。

にしても、なんかすごいな、桜庭くん。みんなが桜庭くんの言うこと聞いているし。

「いーなー、優は。桜庭くんのとなりの席なんて。うらやましすぎるよー」

ちなみに麗奈は、さっきからこの言葉しか言っていない。

「それ言うの、14回目。別にとりだから何？　それに、私は全然興味ないから。桜庭くんに」

私がこのセリフを言うのも、14回目。

たしかに、かっこいい…だろうけど、それだけで、何の感情も浮か

んでこない。別に、普通の男子と変わんないじゃん。

「そりゃ、優は興味ないかもだけど。でもうらやましいんだよ〜っ
はあ…。もう手がつけられないや。ほっとこ…。」

私は横目で、となりの桜庭くんを見てみた。

もうすでに、男子の中心の中に入っている。やっぱり男子も、桜庭くんのこと知ってたのかな？ 私本当に知らなかったんだけど…。
なんてことを考えていたら、なんかみんなが席につき始めた。

「優！ 何ぼーっとしてんの！ チャイムなったよ」

「え、あ、うん。ごめん」

麗奈に言われてハッとした。まったく、私ってば、なにやってんだか。

あ、てか、席に戻るってことは、桜庭くんのとなりに座るってことなんだよね。麗奈がさんざんうらやましがってたけど。あ、ちがった。たぶん、私以外の女子全員もか。

にしても、私はどうしたらいいのかな？ 別に普通にしてればいいん…だよな。

そんなことを考えていたら、急にとなりから声がした。

「ねえねえ」

と。

…桜庭くん、だった。

episode 3

優　く呼び方く

「えっ!?!　あつ、何…でしよう?」

ヤバイ。びっくりしすぎて、言葉変…。

「何?　どーしたの?　何そんなビビってんの?」

桜庭くんが笑ってる。うう、恥ずかしい…。

「や、だって、いきなり話しかけられたし。びっくりするでしょー?」

手を顔の前でバタバタさせて、私は桜庭くんの方を向いた。

「ごめんごめん。そんなつもりじゃなかったんだけど。名前聞こうとしたんだ」

あ?　名前?　あ、そういう普通の会話ね。

「ああ、名前ね。清水優です。よろしく…」

まあ、普通でいいんだよね。

「え!?!　優っていうの?」

わっ!　何?　優がどうかしたのかな?

急に桜庭くんが大きな声を出したから、私はビクツとした。

「うん、優だよ…?　なんかあるの?」

「おれも、佑っていうんだけど。桜庭佑」

えー!?!　そうなの?　でも麗奈何も言っていなかったよね…。

「あー、そうなんだ。同じだね!」

「なんかすごい偶然だな」

そう言って桜庭くんが少し笑った。

…こう見ると、確かに桜庭くんは、かっこいい…と言えなくもなくもない…かな?

って、そんなこと考えてどうすんだよ自分。

「じゃあ、なんて呼んだらいい?」

自分にツツコミを入れたところで、桜庭くんが聞いてきた。

「えっ、ああ。呼び方かあ…。うーん、なんでもいいよ」

私は特に、あだ名とかないしな……。中学の時は、男子も女子も「優」だったし。

「じゃあ、下の名前でもいい？ 優って」

「え、あ、うん。全然いいけど。でも、同じ名前だし、ややこしくない？」

「まあ、そうだけどさ。なんかおもしろいじゃん？ だから、優も、おれのこと佑って呼んで」

いや、おもしろいって。まあ、なんでも、いいんだけど。

「うん、わかった。えっと……佑……くん？」

とりあえず、「くん」を付けて呼ぶのが精一杯だ。

「別にくん付けしなくていいのに。……まあいいや。慣れたら佑って呼んでくれたらいいから」

「あ、うん……」

私が少しとまどいながらうなずいたときに、チャイムが鳴った。

e p i s o d e 3

優　　く呼び方　く（後書き）

ここまで読んでくださって、本当にありがとうございます。
感想書いてくれたら嬉しいです。

episode 4

優　く織ちゃんとの出会い

「ねえ、優。さっきすごい桜庭くんとかべってたじゃん。もしかして、好きになっちゃった？　そうだよーかっこいいしねー！」

「ちょっと待って！　いつ誰が誰を好きになったって！？　だいたい、話しかけてきたのはあっちだよ。話が長くなったのは、名前が一緒に、なんて呼んだらいい？　って話してたからだし。別にうちはそのうのに興味ないし」

私はなおもふざけたことを言い続けそうな麗奈を遮ってそう言った。

「えー、でもさー。けっこう楽しそうに見えたよ。ね？　織ちゃん」
織ちゃん？　って誰だ？

「うん、見えたね」

織ちゃんと呼ばれた子が、そう言った。

「あ、はじめまして。私、如月織花です。よろしくね」
麗奈の後ろの席の子か…。にしても、超可愛い子だな。

「織ちゃんって呼んでるから」

麗奈が付け足してくる。

「ああ、はじめまして。清水優です。よろしくね、えっと、織ちゃん…？」

「うん、優ちゃん…でいいかな？」

「全然いいよ。むしろ優で」

「うんわかった。なれたら優って呼ぶね」

なんかさっきも聞いたような会話…。あ、桜庭…じゃない、佑くと話してたんだっけ。

ま、何にしても、初めての友達だよー！！

「はいはい、はじめましてのあいさつはそれぐらいにして。話元に戻すよ」

麗奈が私と織ちゃんの間に入ってくる。

「それでさ。なんて呼ぶことになったの？」

麗奈が興味深々な顔で聞いてくる。

「普通に：下の名前で、って言われたけど…」

なんでだろ。なんか、別に普通のことなのに、少し恥ずかしい気がする…。

「おー！！　なんか、仲良くなってんじゃん？　やっぱり。てかさ、お互いに、ゆう、って呼び合うの？　なんか変じゃない？」

「いや、あのさ、別に、仲良くなってるってないし。ゆう、って呼び方の話は、私も変だと思ったけど、おもしろいからいいんだってさ」

冷やかすような麗奈の口調に、少しムキになったように答えた。

「へえー…」

麗奈がニヤニヤしている。それを見た織ちゃんは、クスツと笑って、私の方を向いた。

「でも、優ちゃんと佑、お似合いだと思うけどな？　なんか気が合いそうなかんじだったし」

織ちゃんが、満面の笑みで私を見つめる。

でも、私は、その言葉に反論する前に、あることに気がついた。

今、織ちゃん、佑くんのこと、佑って呼んだ…？

episode 5

優　　織ちゃんの正体

「あ、織！」

私が織ちゃんに疑問を持ちかけた時、声がした。それも、佑くんの。

「ああ、佑。　また同じクラスだね。じゃあ、今年もよろしく」

「だな。　どういうわけか、織とはよくクラス一緒になるよなー、本当」

二人の会話を前に、ポカンとする私と麗奈。

「じゃ」

「うん」

二人はそっけないあいさつで会話を切った。

私たちの中に、しばらく沈黙が続く。

「二人とも、どうしちゃったの？　何の話してたっけ？」

織ちゃんは何事も無かったかのようにこっちを向く。

「いやいやいや！！　織ちゃんって、もしかして、桜庭くんと…」

麗奈がそこまで言って口を閉じた。でも、麗奈の聞きたいことは、手に取るようにわかる。

二人の関係、だ…。

「待って待って！　二人とも、なんか勘違いしてるよ。私と優は…え？　何？　何かあるの？」

「いどこだよ？」

へっ…？

い…どこ…？

「ええー！？　そうだったの？　うそ、マジで？」

麗奈が驚きを隠しきれないでいる。

「うん。　まあ、名字も違うし、あんまり似てないし、わかんないでしょ？」

そう言ってニコつとした織ちゃん。やっぱり可愛い。

言われてみれば、二人ともキレイな顔立ちだし、いっこっていうのも、納得できる気がするな…。

「まあ確かに。いっこだからね。でも、二人して美男美女だし、すごいね」

私は感心しながらそう言った。

「そんなことないよ。確かに、佑はかっこいい方だと思うけどさ。家ではあんなじゃないし。私は全然美人じゃないし」

「いや、織ちゃんは、美人さんだよ」

麗奈がそう言うのと、織ちゃんは顔を赤くして、そんなことないから、を連発していた。

そっか…。いっこだったんだ。だから、佑って呼んでたんだ。

私がそう一人で納得していたときに、休み時間終了のチャイムが響いた。

episode 5 優 〱織ちゃんの正体〱（後書き）

ここまで読んでくださって、本当にありがとうございます！！
とっても嬉しいです。

素人が書いた、ヘタな内容ですが、これからよろしく願います。

episode 6

佑 〈有名人!?〉

中野山高校。今日からおれが通う学校。今は、その学校の、1年4組の前にいる。

今日は入学式。そして今は、8時10分だ。

いや、全然遅刻じゃねーんだけどさ。初日って、だいたいみんな早く来たりするじゃん？ その中じゃ、おれ、すっげー遅い方かもしれないな…。

ガラガラー…

なんかみんなが静まってる。さっきまでは、廊下にも、ちらほらおしゃべりの声が聞こえてきていたのに。しかも、なんかおれのこと見てるし。

「…どうしたの？　なんかこのクラス静かじゃん。みんなもつしやべろーよ。仲良くしよーぜ？」

おれは自然とそう言っていた。

だって、高校生だぜ？　学校生活は楽しみたいじゃん。みんな静かとか、ヤダし。

「ねえ、名前なんていうの？」

おれは手始めに、近くにいた男子に声をかけた。

「あ、おれは、須藤 翼」

元野球部か…？　坊主が少し伸びたような髪型だ。

「顔に似合わねえ名前だろ？　おれ、野球部だったからさ。ずっと坊主だったし」

そう言って笑う須藤。

「まあ、確かに。おれは、桜庭 佑。佑でいいから。よろしくな」

おれは、納得して、うなずいた。やっぱり野球部だったんだ。

「おれも翼でいいから」

翼とは、仲良くなれそうだな。いいやつそうだし。

「てか、佑、お前すげえよな」

いきなり翼が口を開いた。

「は？ 何が？」

「お前、超有名人だぜ？ うちの中学の女子とか、ほとんど佑のこ
と知ってたし。何でも、東中の王子様らしいぜ」

はああ？ 何だそれは…。

「お前かっこいいしなー。このクラスの女子も、たぶん知ってると思
うよ。だからさっき、佑が来たとき、みんな静かになったんだよ」
「いや、おれそんなかっこよくねーし。つか、東中の王子様って
何だよ！？ 初耳だけど？」

おれは少し声を荒げて翼に反論した。

「そりゃあ、本人には言わねえだろ。…とにかくお前は、超モテる
ってことだよ！」

モテて…んのか、おれ？ いや、告白されたことくらいは、何回か
あったけどさ。彼女とか、いたことねーし？ 今もいねーし…。

「そうそう、うちの中学でも、有名人だった」

「おれんどこでも！」

いつのまにか、クラスの男子がこっちに来ていた。

そしてみんな口々に言う。おれが有名人だと…。

なんか、わけわかんねーんだけど！？

episode 7

佑（優と佑）

キンコンカーンコン

チャイムが鳴った。みんなが席に着く。

おれも席に着いた。

先生はまだ来ていないのか…。

どうしよっかな？ とりあえず、隣の女子にでも話しかけてみるか。

「ねえねえ」

「えっ！？ あ、何…でしよう？」

えっ…。そんなに驚かせちゃったかな？

「何？ どーしたの？ 何そんなビビってんの？」

おれは笑いながら聞いた。

「や、だって、いきなり話しかけられたし。びっくりするでしょー？」

そ、そうかな？ なんか悪いことしたかな…。

「ごめんごめん、そんなつもりじゃなかったんだけど。名前聞こうとしたんだ」

「ああ、名前ね。清水 優です。よろしく…」

清水優さん、ね…。って！！

「え！？ 優っていうの？」

おれの名前と一緒にゃん！

「うん、優だよ…。なんかあるの？」

「おれも、佑っていうんだけど。桜庭佑」

目を丸くした清水…さん？ に、おれはそう言った。

「あー、そうなんだ。同じだね！」

清水さんがそう言って笑う。よかった、笑ってくれた。だから何？ とか言われたらどーしよーってちょっと思ってたんだけど。

「なんかすごい偶然だな」

おれもそう言って少し笑った。

てか、清水さん、っていうのは、なんかヤダな…。でも、なんて呼んだらいいのかわかんないしな…。普通、仲良くなるなら、下の名前で呼んだほうがいいんだよな？ まあ、優と佑でややこしいかもだけど。

まあ、おもしろいからいつか。

「じゃあ、なんて呼んだらいい？」

とりあえず聞いてみることにした。なんかあだ名とかあるなら、そっちの方がいいだろうし。

「えっ、ああ。呼び方か…。うーん、なんでもいいよ」
なんでもいいか…。じゃあ、やっぱり下の名前でいつか。

「じゃあさ、下の名前でもいい？ 優って」

「え、あ、うん。全然いいけど。でも、同じ名前だし、ややこしくない？」

「まあ、そうだけどさ。なんかおもしろいじゃん？ だから、優も、おれのこと佑って呼んで」

あ、今普通に優って言っちゃったけど…。いいんだよな？

「うん、わかった。えっと…佑…くん？」

あ、よかった。気にしてないかんじだな。でも、くん付けなんか、しなくていいのにな…。

「別にくん付けしなくていいのに。…まあいいや。慣れたら佑って呼んでくれたらいいから」

「あ、うん…」

少しとまどったようにうなずいた優。なんかおれへんなこと言ったかな？

そんなことを考えていたら、チャイムが鳴った。

そういえば、いつのまにか先生来てたんだな。何にも言わないから、気づかなかった…。

episode 8

佑　（彼女？）

休み時間。おれはクラスのが男子たちとしゃべっている。

「何！？　お前彼女いんの？」

「まあなー」

今の話題は、彼女がいるいないってやつ。まあ、リア充を探してるかんじ？

「おれいねえんだよなー…」

翼がそう言って嘆く。

「佑はいいよなあ。彼女絶対いるんだろ？」

…話を振られた。そんなこと言われてもな…。

「おれいねーよ？　彼女とか」

おれがそう言った瞬間、みんながバツとこっちを見る。

「え？　何？　どーした？」

「何じゃねえよ！！　うそだろ！？　あ、何か？　今はいいけど、

まえはたくさんいたよ、みたいな？」

いや、だから…。

「いねーって。おれ、彼女いたことないから」

みんなの目が丸くなる。おれ、なんかした？

「マジで…？　そんなにモテてんのに？」

翼が信じられない、って顔をする。翼だけじゃなく、他のやつもみんな驚いた顔をしている。

だから、おれモテてなんかねーんだけど…。

「えー！？　じゃあ、好きになった人とかいないの？　まさか…」

「ああ、うん」

いや、別に普通じゃないの？

「本当かよ…。じゃあ、可愛いなーとか、思うやついねえの？」

ぐるとクラス中を見ながら翼が言った。

可愛い、か…。織は…まあ、可愛い方だと思うけど、いとこだし。

あとは…。

優、とかか？

優は、笑うとけっこう可愛かったよな…。でも、なんか緊張してんのか、あんまり笑ってくれなかったな。人見知りとか？でも、普通に話してはくれたし…。

「おい？ 優？ 何ぼーとしてんの？」

目の前で手を振られる。かなりビックリした。

「わっ。あ、うん。ゴメン…」

「何ー？ 可愛いなって思うやついんの？ 誰だれー？」
なっ…。

「ち、ちげーよ！！ そんなじゃない」

慌ててそっぽを向くおれ。何やってんだ？ これじゃ、逆に怪しいだろ！

「へーえ…。ふーん」

案の定、翼はニタツとしている。怪しい笑みだ…。

「だから違うって。…もうすぐチャイム鳴るから、席つく！」

おれはとりあえず自分の席に逃げた。

何なんだよ、もう…。

「えーっと、1年4組担任の、谷山 将生ですー。まあ、よろしく」
今日、初めて担任の先生がしゃべった。

「いやー、さっきもちゃんと教室来てたんだけどさー。みんなが楽しそうだったから、まあほっといたわけ。でもー、今日どーしても決めなきゃいけないことが一つだけあってさ…。さっさとそれ、決めちゃおーと思いますー」

な、何かずいぶん適当な先生だな…。まあ、怖い人より全然いいけど。

「ま、もうみんな知ってるかもなんだけどー、再来週から、1年生は、移動教室として、京都に行きますー」

やったら「ー」が多いな…。って、そこじゃなくて、京都!?! っ
て、何?

「でー、その班を決めたいんだけどー。…名前順でいーでしょー?
とにかく時間がないからさ。早くしないと入学式始まっちゃうんだよねー」

そんな理由で…?

「じゃあ、ちょっと自分の班確認してー」

谷山先生…が、すでに用意してあった、班分けのプリントを配る。

「おお。優と一緒にだ」

隣で佑くんがそうつぶやいていた。確かにプリントを見ると、佑くんと私は一緒の班だ。

「そうだね。まあ、近いからね、名前順。移動教室でもよろしくね
!」

私はそう言って、佑くんの方を向いて少し笑ってみた。

「おう!!」

佑くんもこっちを見て、笑ってくれた。

「はいー、みんなちよっと静かにー」

ザワザワしてきた中で、先生が少し大きな声を出す。でも、あいかわらず「ー」は多いんだな…。

「それで、係も決めなくちゃいけないんだけどー、めんどくさいから、こっちで決めちゃいまーす」

何という先生だ、一体!?

私は何か不安になって、なぜだか佑くんの方を向いてしまった。

佑くんは、ん? って顔をしてこっちを向いた。

「あ、いや…。何の係があんのかなーって思ってた。まあ、佑くんが知ってるわけないよね」

あはは、と笑ってごまかす。完全に苦笑いだっと思った、今の顔…。

「まあ、班長とか、副班長とかは絶対いるよなー」

けっこう本気に答えてくれる佑くん。入浴とか? 食事とか? と、ずっとブツブツ言っている。

「はーい、発表します。今、机を班の形にしたときに、一番前に座ってる男女ー。その二人のどっちかが班長で、もう一人が副班長ねー。次ー、二列目のひとはー…」

私の班の一番前って…。私と佑くん、だよな。うわー、班長とか、絶対イヤだな…。みんなをまとめるとか、無理だし。何より、仕事絶対多いし。どーしよー。

「…あのさ、おれ班長でもいいよ?」

「え?」

おもわず聞き返してしまった。だって、普通は自分からやりたいなんて言わないよ?

「本気にいいの?」

「うん。なんか、優すぎくやりたくなさそうだし。おれ、昔からこの手の係はしょっちゅうやらされてたから、慣れてるんだ。だから気にしないで、副班長やれよ」

「…ありがとう」

ヤバイ。優くん、いい人すぎる…。今本気で佑くんがいてよかったって思ったよ。

「あ、でも、副班長として、ちゃんと班長を手伝っている仕事はしてもらうからね」

「何それー？ 副班長っていったら、何もやることなくて、一番楽な係の代名詞だよ？」

あ、おもわず本音が……。班長やってくれたのに、ひどいこと言っちゃったかな。

「何だよそれ。何かウケる」

予想外の大笑い。でも、私もつられて笑ってしまった。

「じゃあ、とりあえず班の形にしてください。とりあえず、その中で自己紹介でもして、仲良くなってねー」

仲良くなってねーって……。何もすることなかったのか？

そして初日には定番の、自己紹介が始まった。

「おれ、班長の桜庭佑。佑って呼んでくれていいから」

班の形にした後、自然な流れで班長から自己紹介が始まった。

「あ、私は、副班長の清水優です。私も、優でいいからね」

そして、副班長の私に順番がきた。

「おれ、会計の須藤翼。何て呼んでもいいから。よろしくー」
須藤、翼くん…ね。佑くんの後ろの席の人だ。

「うちは、瀬田円嘉。あ、同じく会計だから。うちも呼び方はなんでも。よろしく」

瀬田円嘉ちゃん…。可愛い名前だな。まどか、って、なんかお嬢様みたい。

「おれは、田所晃。こう、でいいです。ちなみに、記録係なので。よろしくお願いします」

田所晃くん。なんか、すごく礼儀正しいというか…。頭良さそう…。

「あたしは、曾根美優。記録係ね。みゆとか、みーちゃんとか、まあいろいろ呼び方あるから、好きに呼んでね。よろしく!」

曾根美優、ちゃん。えっと、みーちゃん、だっけ? すごい女子ってかんじの子だなあ。元気だし。

「…これで全員だな。えっと、優に翼に円嘉に晃に美優! ……噛まずに言えた…。よし、移動教室楽しいのにしよーぜ!」

佑くんが、みんなの名前を読んで、そう言った。

「うん」

「おっし!」

「そうだね」

「わかりました」

「うん、楽しもー!」

みんなが返事する。にしても、いろんなキャラが集まったなっと思うのは、私だけ?

「で、この後なにをするの、優？」

佑くんが私を見ながら言う。

「え、いや、知らないよ。自己紹介しろって言われたただけだもん……でも、私は何も知らない。ごめんね……」

「うーん……。じゃあ、適当にしゃべってるか。みんなで仲良くなっちゃおう!!」

おー？ ま、いっか。みんなとも仲良くやっていきたいし。

「ねえっ、優、だよな？」

「あ、うん！ えっと、みーちゃん……？」

すぐに話しかけてくれたのは、曾根美優ちゃん。みーちゃんだった。

「うん、そーだよ！ 仲良くしようね!!」

「うん、よろしくね」

みーちゃんはすぐ話しやすくて、いい子だなー。よかった、みーちゃんと一緒に。

「ねえねえ。円嘉だよな？ よろしくね」

「あ、うん、よろしく」

「あ、私も。よろしくね、円嘉ちゃん」

私はみーちゃんに続いて円嘉ちゃんにあいさつした。

そして、ふと、佑くんたちの方を見ると、すでに楽しそうにしゃべっていた。

やっぱり、佑くんってすごいんだな。なんていうか、人をフレンドリーにさせてしまうというか……

「どしたの、優？」

みーちゃんが心配そうに私の顔をのぞきこんでくる。

「あ、何でもないよ。ごめんね」

私はそう言って、みーちゃんと円嘉ちゃんとしやべり出した。

ちなみに、なかなか先生が来なかったの。このおしゃべりは、入学式が始まる体育館に行くまで続いていた。

episode 1 優 〈入学式〉

この学校は、来てすぐに入学式ではなく、3時間目くらいになってから入学式を始めるという、よくわからない制度があった。たぶん、みんなに仲良くなってほしいから、っていう理由だと思うけど。

「えー、本日はー、たいへん天気も良く…」

移動教室の話がまだ中途半端なまま、結局先生は来ず、3時間目になった。そして、校長先生の、お決まりのあいさつから、入学式は始まった。

私の隣は、もちろん円嘉ちゃんとみーちゃん。みーちゃんは、今にも寝ちゃいそう。

私も、もう死にそうなくらい眠い……。今日緊張で5時に起きちゃったし…。

「優、眠くない？ もう私限界…」

みーちゃんが欠伸まじりで、それでもって小声で、私に話しかけてきた。

「私もだよ…。よくみんな起きていられるよねー。円嘉ちゃんなんて、さっきから全く動かずにきちんと座ってるしさ」

そう、円嘉ちゃんは、始まってから全然体を動かしてなくて、しかも、誰ともしゃべってなくて、背筋がピシッとしている。

「え？ 円嘉寝てるじゃん。優、気づかなかったの？ 始まってからすぐに寝てたよー」

えええ！？ これ寝てるの？ だって、姿勢超いいよ！？ さっきから本当に動いてないし…。

私は、円嘉ちゃんを突っついてみた。

……反応なし。

すごいなー…。本当に寝てる。器用だなあ。

って、感心してる場合か！ どうしよう、起こしたほうがいいのかな？

今は、校長先生の長い話も終わり、先生の紹介に入っている。

「どーしよー、みーちゃん……。円嘉ちゃん、起こしたほうがいいかな？」

私はみーちゃんに聞いてみた。

「うーん……。そのままでもいいんじゃない？　なんか気持ち良さそうだし。最後らへんで起こしてあげなよ」

みーちゃんは、少し笑いながらそう言った。もしかして、なんか面白がってる？

そんなこんなはあったけど、入学式は順調に進んでいった。そして次は、新人生挨拶。誰がやるのかな……？

「新人生挨拶。新人生代表、桜庭佑」

……へっ？

私は完全に眠気が吹っ飛んだ。

確か、新人生代表って、入試トップの人がやるっていうウワサがあったような……？

……佑くんって、頭超いいんだ。本当に何でもできるんだな……。さすがにびっくりしたよ……。

「ねえ、あれ、うちの班の人だよね？」

みーちゃんが聞いてきた。

「うん、そう。佑くん……あ、班長だよ」

みーちゃんは、佑くんじゃまだわからないかな？　と思って、班長と言い直した。

「なにになー？　もう名前で呼び合ってるかんじー？　もしかして、これは恋の予感かなー？」

……と思ったのが、裏目に出た。みーちゃんは、かなり楽しそうにニヤニヤ。きつと、恋バナとかそういう系のやつが大好きなんだろうな……。

「いや、流れでだし。別に何にもないから！」

私は小声で、でもなるべく強めの声で言った。

「おー？　どうしたの、そんなムキになっちゃって。もしかして本

当に…」

「だからそんなことないって!!」

さっきよりも、少し大きな声で怒鳴ってしまった。隣で、欠伸をする声がする。円嘉ちゃんが、起きたみたいだ。…たぶん、私のせいだ。

「何? どうかしたの?」

眠たそうな目をこすりながら、円嘉ちゃんはこっちを向いた。

「そうそう、それがねー…」

「何でもない!! 何でもないよーっ!」

私はみーちゃんの言葉を遮って、手をバタバタさせた。

「…何かよくわかんないけど。後でゆっくり聞かせてもらおうよ。今は静かにしといた方がいいんじゃない? 入学式真っ最中だよ」

いやいや、その真っ最中に寝てたのは誰ですか!?

まあ、でも、これ以上しゃべり続けるのもマズイかもね。そろそろ先生にバレちゃいそうだし。

「…新入生代表、1年4組、桜庭佑」

あ、新入生挨拶終わった。佑くん、あんまりよく見てなかったけど、すごかったな…。あれ、全部一人で考えたのかな?

教室もどったら、聞いてみようっと。

この後は、中学からのお祝いの言葉などがあったけど、ぼーっとしていたら、すぐに入学式は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9976s/>

初恋の色

2011年7月9日14時28分発行